茨城 2020/2/12

土浦市のまちづくり

筑波大生ら提案

新交通サービス、農業体験

「駅東に交流拠点」開設、新交通サービス導入、学校跡地で農業・宿泊体験…。土浦市のまちづくりを若者目線で考え提案する発表会「地域イノベーションシンポジウム」が7日、同市中央の亀城プラザで開かれ、筑波大生が聞き取り調査を経て計画案を取りまとめた。市が抱える課題を地区ごとに読み解き、新しい考えを示した。

発表したのは、都市計画専攻の「都市計画マスタープラン実習」で学ぶ48人の学生。各6人の8班に分かれ、約3カ月にわたって行政や市民への聞き取りや分析を行った。人口・財政、産業振興・観光、防災を含む6分野の課題をつかんだ上で、まちづくりの計画を作った。

この日は「攻める土浦、守る土浦」「市内循環都市～世代にわたって住みよく暮らす」といった題で図や表を作る技術を使いこなして報告した。

第2班の学生は、市内全域を自転車、路線バス、電車の三つの公共交通で結ぶ新交通サービスを提案。月ごとに決まった料金で使える乗り合いタクシーや、放置自転車を再利用し貸し借りできるシェアサイクルを取り入れ、「アプリを使って予約や決済ができ、利便性を高める」ことを前提に計画を作った。土浦駅東口から土浦港までの一帯は温浴施設や展望台、住民によるカフェ、商業地域を配し霞ケ浦の風景を生かす案を出した。

土浦のまちづくりについて発表する学生＝土浦市中央

第6班は、食と農を軸にしたグリーンツーリズムを進め、新治地区の旧山ノ荘小学校跡に農業体験型の宿泊施設を置く案を提示。駅近辺の商業施設モール550は空き店舗が目立つことから、半分を取り壊して広場を設け親子連れも来店しやすい明るい雰囲気にするとした。学生たちは「中心街の活性化が見込まれ、まちの魅力が高まる」と効果を見通した。

（綿引正雄）